

編集後記

『日中語彙研究』第12号をお届けします。辞典史1篇、特集論文4篇、論文3篇、新語録、動向各1篇、今までの本誌の頁数をはるかに上回る分厚い一冊となった。コロナの感染状況も落ちつきを見せ、日常が少しずつ戻りつつあるこの暖かな春の日に、本号をお届けできることを幸いに思いますと同時に、玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様へ感謝申し上げます。

〈辞典史〉には、創刊号から連載されてきた今泉潤太郎先生の「資料による中日大辞典編纂所の歴史」が掲載されている。8回目を数えた今回が最終回となる。これまでの連載内容を「今泉潤太郎先生中日大辞典史」としてブックレットにまとめて発行する予定であることをここに予告しておきたい。〈特集〉には、「S. R. ブラウンの翻訳書『致富新書』とその周辺」と題して、千葉謙悟氏による「中国におけるS. R. ブラウンの活動」、朱鳳氏による「『致富新書』の翻訳考—原書との比較を中心に—」、塩山正純氏による「『致富新語訳』（1875）が経済を説明したことばについて」、奥村佳代子氏による「『致富新書』の訓点本—和訳本との関連を中心に—」の4篇が掲載されている。この分野の研究者のみならず、他分野の方にも興味深い内容であるに違いない。〈論文〉には3篇、石崎博志氏の「食品表示における文語表現—レアリアによる中国語教育の一環として(7)一」、冯璠氏・曲烜氏の「“大半”的历时演变」、李璐氏の「上古汉语无定代词研究中存在之分歧辩证」が掲載されている。石崎論文は日本学術振興会科学研究費補助金基礎研究(C)の「中国語教育のためのレアリア・文化語彙理解の基礎的研究」の「7」を数える継続研究になる。中国人研究者による2篇の史的語彙研究は、先行研究に対する整理や批判など独特な見解が含まれており、それぞれの語の現代語の意味を理解するうえでも示唆的な研究になる。〈新語録〉には、趙蔚青氏の「2022年中国の新語・流行語」、〈動向〉には、施暉氏の「中国における中日語彙対照研究の動向2022」が掲載されており、現代中国社会を反映する新語・流行語と中日語彙対照研究について最新の情報を知るうえでの貴重な資料になる。

以上の10篇が日中語彙対照研究ないし日中語学教育の参考になれば幸甚である。

(編集委員会)

『日中語彙研究』第12号

2023年3月31日発行

編集・発行 愛知大学中日大辞典編纂所

名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777

Tel. 052-564-6122 Fax. 052-564-6222

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>

組版 株式会社あるむ
